

UP, 2004.

Guy, Josephine M. "The Soul of Man under Socialism: A (Con)Textual History." *Wilde Writings: Contextual Conditions*. Ed. Joseph Bristow. Toronto: U of Toronto P, 2003. 59-85.

Tanaka, Yusuke. "The Premature Burial of Liberalism: Inadequate Fetishists in Oscar Wilde's The Picture of Dorian Gray." *Hitotsubashi Review of Arts and Sciences* 4 (2010): 243-65.

Trilling, Lionel. *Sincerity and Authenticity*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1971.

Wilde, Oscar, "The Soul of Man under Socialism." *The Complete Works of Oscar Wilde*. London: Collins, 2003. 1174-97.

ヴィルノ, パオロ『マルチチュードの文法——現代的な生活形式を分析するために』広瀬純訳、月曜社、2004年。

大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド——戦間期イギリスのモダニティ』慶応義塾大学出版会、2010年。

大貫隆史「演劇的近代(2)——Modern Tragedyと制約、全体性、そして不可避性の問題」『レイモンド・ウィリアムズ研究』第1号(2009年10月):113-135頁。

小野二郎「ウィリアム・モリスと世紀末——社会主義者オスカー・ワイルド」『装飾芸術—ウィリアム・モリスとその周辺』青土社、1979年、43-58頁。

河野真太郎「自由」『Web英語青年』157巻1号(2011年4月):28-40頁。

小関隆編『世紀転換期のイギリスのびと——アソシエーションとシティズンシップ』人文書院、2000年。

関曠野「ベーシック・インカムをめぐる本当に困難なこと」『現代思想』vol. 38-8 (June 2010): 210-8頁。

森山亮『ベーシック・インカム入門』光文社、2009年。

深淵のユートピア

—ワイルドとモダニズムにおける批評言説

秦 邦 生

1. 批評／批判とはなにか？

オスカー・ワイルドにおける「批評／批判」とは、いかなるものだろうか。『キーワード辞典』(1976年)において、レイモンド・ウィリアムズは criticism という言葉の語義の変遷についておおよそ次のように述べている。この言葉の最初期の主要な意味は fault-finding、つまり「非難」や「あら探し」という意味だったが、それに代わって17世紀後半以降、judgement、特に文学や芸術に関する判断や裁断の意味が徐々に台頭し一般化して「趣味」や「教養」との連想が成立した。だが、ウィリアムズはこの語義の変遷を問題視し、criticism (批評) が judgment (判断) に還元されてしまうと、文学や芸術を享受する消費者を前提すると同時に、特定の趣味や教養を備えた「批評家」のみを権威化・特権化することに結びつくと指摘している。これに対してウィリアムズが提起する批評観は、「その全体的状況や文脈と活発で複雑な関係を切り結ぶ一定の実践」(Williams 86) というものである。すなわち抽象的裁断ではなく、具体的実践としての批評／批判。ワイルド、ひいてはモダニズムに、そうした実践としての批評を見出すことは可能なのだろうか。

2. モダニズムのワイルド

以上の問いを念頭に、まず盛期モダニズムとの関係でワイルドの批評を見てゆこう。1914年、「渦巻派」という前衛芸術運動を準備していたウィングダム・ルイスは、ライヴアルのイタリア未来派を揶揄する「自動車主義」という短文を発表している。ここでルイスは、未来派が喧伝した「機械の美学」を、すでに世紀末のワイルドが先駆けていたと述べている (“Automobilism” 34)。未来派は1909年の記念的な「創設マニフェスト」において、当時のテクノロジー的革新のスピー

ドと暴力的エネルギーを「近代」の偶像として熱狂的に讃えていた。他方、ルイスが指摘したワイルドの機械賛美はアメリカ講演旅行からの帰還後に、旅の印象を語った1883年の講演のなかに見ることができる。ここで彼はシカゴで見たポンプ場の壮観を、「リズムカルに動くもっとも美しいもの」と、ほとんど未来派的な語彙で讃えている（*The Artist as Critic* 7）。ワイルドが未来派を四半世紀近く先駆けていたならば、まず、しばしば主張されるような唯美主義と前衛芸術とのあいだの断絶は掘り崩されるだろう。

ただ、ワイルドの先駆性を指摘するルイスの目的は、あくまで未来派に対する攻撃だったという点には注意が必要である。未来派とワイルドとを結びつけることでルイスはその「新しさ」に疑問符を付し、ひるがえって自身のラディカルズムを演出している。その証拠に、1927年の『時間と西洋人』でふたたびワイルドの機械賛美を指摘したルイスはそれを「産業のロマンス」だと呼び、究極的に産業資本主義へと還元している（*Time* 3）。ルイスは未来派を〈生〉への盲従として批判する一方で、彼自身の渦巻派を〈芸術〉による〈生〉の支配だと宣言した（*Blast* 148）。ところが、ワイルドの1883年の機械賛美を人工物への賞賛だと取れば、そこから「虚言の衰退」の教義——〈生〉や〈自然〉に対する〈芸術〉の優位——までの距離はただの一步だろう。すると、ここで問題となるのは、ワイルドとモダニズムとの分断ではなくむしろ両者の連続性、さらに後者による前者からの影響の抑圧である。

モダニズムがこうした抑圧に走った理由はここでは問わないが、¹ワイルドと正典的モダニズムの連続性をもっとも顕著なのはまさしく「創造」に対する「批評」の優位を定式化した点である。ロナルド・ブッシュが指摘するように、T. S. エリオットの「批評の機能」とワイルドの「批評家としての芸術家」の主張はかなり近い（*Bush* 473）。そもそも後者は、『一九世紀』誌に掲載当初、「批評の本当の機能と価値」と題され、マシュー・アーノルドへの対抗意識を前面に押し出していた。では、その「機能」とはなにか。エリオットにとっての批評とは「本質的に秩序の問題」（*Eliot* 23）であり、この「秩序」という語に彼の新古典主義や、保守主義の響きを聞くのは困難ではない。かたやワイルドは批評の使命を人種的偏見の除去とコスモポリタニズムの実現とする一方で、それを「カオスに形式を強要する義務」（*The Artist as Critic* 403）であるとも表現しており、やはり「秩序」の重視がうかがえる。

だが、「批評」の機能がカオスに対する秩序の擁護として絶対視されるとき、それはウィリアムズのいう抽象的裁断と化してはいないか。そのような批評は、

特権的な享受者の立場を自明視すると同時に、その立場を隠蔽することでイデオロギーと化してはいないだろうか。趣味判断としての批評に対するこのような疑念は、T. W. アドルノに共有されている。²彼は、資本主義下の文化と文化批評の共犯関係を弾劾しつつ、次のように述べている。

文化批評がいわば展示された諸概念の蒐集にうったえかけ、精神、生命、個人といった孤立したカテゴリーを物神としてあつかう場合に、批評家の絶対性そのもの、すなわち対象についてより深い知識を持っているという自負や、批評的判断の独立性による観念と対象の分離は、対象の物質的形態に屈服する兆しを示してしまう。（*Adorno* 23）

つまり、趣味判断へと墮落した批評は、精神や個人といった観念を社会から分離して実体化する身振りで、逆説的に文化の物象化・商品化に加担する。ワイルドが世紀末の爛熟した消費文化を舞台に自己創造を演出したことはよく知られているが、では彼の批評も、究極的に消費文化への共犯として断罪されるべきなのか。ならば、『時間と西洋人』においてワイルドを「産業のロマンス」に結びつけたウィンダム・ルイスの批判は、結局は妥当なものなのだろうか。

3. ユートピアとしての社会主義

この問題の答えを探す近道は、ルイスがおそらくは意図的に無視した要素、つまりワイルドの社会主義への真剣な関心を想起することだろう。この筋道を経て、彼の批評は judgment（判断）から practice（実践）に接近する。『社会主義下の人間の魂』の議論の詳細にあらためて立ち入る余裕はないが、私有財産の撤廃によって真の個人主義の普遍的实现を唱える彼の議論のユートピア的性格をここで強調しておきたい。³

このテキストのユートピア性は、あらゆる完璧な理想につきまとう実現可能性の問題を示唆している。『未来の考古学』においてフレドリック・ジェイムソンは、あらゆるユートピア的形式は closure（閉止＝完結性）、すなわち現実からの断絶という特徴を共有していると論じている（*Jameson* 202）。例えばトマス・モアにおいては、ユートピアの周囲に掘られた巨大な壕がそこを外界から隔絶することで理想社会建設が可能になる。ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』の場合、語り手が属する現代と、未来の理想社会の時間的隔絶がこれに対応する。現実の社会からの完全な断絶によってはじめて、作家は現実と完全に異質

な理想社会を想像する余地を手にする。ただしこのような隔絶によって、ユートピアは「移行」という重大な問題を括弧に入れてしまう。理想とはほど遠い現実と、完全な理想社会とのあいだにどうすれば「橋」を架けられるのか——ユートピア主義者は誰もがこのジレンマを共有している。ユートピアの創設経緯は、モアにおいてもモリスにおいても回顧的に示されるのみで、語り手は決してその移行過程を直接に体験することはないのだ。

「ユートピアを含まない世界地図は一瞥にも値しない」(*The Soul of Man* 16)——ワイルドはこう述べているが、それでは彼の地図には、ユートピアへの道は書き込まれているのだろうか。『社会主義下の人間の魂』はキリストを理想的な個人主義者として提示しているが、ワイルドは繰り返し「彼には社会を再構築する計画がなかった」と強調している。対照的に彼は近代社会と科学への楽観的な信頼を表明するものの、私有財産の普遍的な撤廃がいかんして可能なのか、その方策は決してつまびらかにはされていない。

この作品は前半の社会論と後半の芸術論に大まかに分けられるが、この構造的特徴を、まさしくこのジレンマの徴候として理解できるかもしれない。というのも、ワイルドはここで芸術家を、現在における真の個人主義の唯一の体现者、未来のユートピア的社会を先取りするものだと措定しているからである。

現在は重要ではない。私たちがあつかわなければならないのは未来なのである。というのも、過去は人間がそうあるべきでなかったもの、現在は人間がそうあるべきでないもの、未来は、芸術家たちが現にそうであるものなのだ。(The Soul of Man 31)

この一節では、不完全な現代社会と完全な未来社会とのユートピア的断絶は、現時点における非芸術と芸術、「人間」と「芸術家」の対立へと置換されている。この置換を機に、ワイルドの議論は、理想社会への賛歌から芸術に無理解な大衆の罵倒へと横すべりしてしまう。例えばある箇所では、芸術への理解という点では「暴徒」より「独裁者」の方がまだましだとすら仄めかしている(*The Soul of Man* 29)。大衆蔑視という盛期モダニズムの悪しき傾向を、ワイルドは萌芽的に示しているのかもしれない。理想社会の追求が大衆蔑視と逆説的に共存するこの地点で、彼の批評がなんらかの修正を必要としているのは明らかだろう。この特有のユートピア的衝動と裁断的批評との矛盾こそが、ワイルドを批評の深淵へと導いたのではないか。

4. 深淵の批評

ここで重要なのが、ワイルドの獄中書簡『深淵より』である。このテキストの位置づけをめぐって批評家の意見は一致していないが、ここでは、シェルトン・ウォルドレップにならって、この作品の実験的折衷性を強調したい。これは私的な書簡形式に、批評、哲学、思想史、宗教的告白、自伝などのジャンルを組み合わせた文学的パフォーマンスであり、そこでワイルドは「自己創造の美学」を実演している(Waldrep 62)。ただしこのような自己(再)創造は、気ままな自由の条件下ではなく、逆説的にも彼がまだ投獄中だった1897年、すなわち、厳然たる社会的制約、拘束下において演じられている。⁴

この作品の第二の重要な特徴は、呼びかけの構造の複層性である。ダグラスへの手紙として書かれたこのテキストはつねに「私」から「あなた」への語りかけという構成を取っているが、その内容はまったく私信の枠に収まらず、自身を断罪した同時代の公衆を相手取った自己弁護や弾劾のように読める部分もある。⁵つまり、ダグラスという特定の「あなた」の背後には当時の公衆の影があり、さらにその「あなた」の位置に、私たち読者が召喚されている。この文法構造は「あなた」の多重化を生み出すが、手紙の宛て先は決して完全には抽象化されず、「私」の語りはつねにダグラスに対する弾劾、呪詛、懐柔、哀願、誘惑という、激しく揺れ動く情動の渦に呑まれている。この関係構造への巻き込みは読者の位置を動揺させるのみならず、重要なことに、語る主体の透明性自体を崩壊させている。すなわち、それは決して抽象的な裁断型批評ではなく、ここでもう一度レイモンド・ウィリアムズの言葉を借りれば「その全体的状況や文脈と活発で複雑な関係を切り結ぶ一定の実践」なのである。

以上を要約しよう。まず、このテキストは自己創造のパフォーマンスである。ただし、その自己創造は二重の制約と抜き差しならない関係を切り結んでいる。それは第一に、ワイルドを投獄した社会的規範——具体的には1885年の刑法改正法だが、より抽象的には、当時の中産階級の異性愛と父権制家族の規範である。第二に、語りの運動自体を情動に巻き込むさまざまな「あなた」との関係——つまり、他者との相互承認の構造である。ジュディス・バトラーによれば、批評とはまさしくこの二重の制約と自己創造との相克が生みだすものである。

批判とはたんに所与の社会的実践や、実践と制度が現れる場である理解可能性の地平への批判ではなく、私が自分自身にとって問題化することも含んでいる。……この種の自己への問いかけは、他者に承認される可能性自

体を危険にさらすことで、自己自身を危機にさらすと判明する。(Giving 23)

ここで批判とは、社会的規範を標的にすることで、その規範によって生産された自己の主体性自体を問いに付し、危機にさらす実践のことである。それは必然的に、しばしば逸脱的な自己変容を伴わずにはいない。

『深淵より』におけるこのような批判と自己変容のモードは、二つの情動のあいだの絶えざる振動として記述できるかもしれない。一方は同性愛の断罪と投獄に発し、しばしばワイルドを獍猛な呪詛へと駆り立てる humiliation (恥辱)。他方は、その恥辱と同語源だが、擬似宗教的「キリストのまねび」によって恥辱を回収する humility (謙讓) の倫理。前者はワイルドの回想とともに執拗に回帰しているが、もっとも印象的なのは次の場面だろう。1895年11月、ワンズワースからレディング監獄に移送される途上で手錠のまま駅のホームに立たされたワイルドは、乗客たちの残酷な視線に曝され、手ひどい嘲笑を受ける。「全ての対象の中で私がもっともグロテスクだった」(*The Soul of Man* 129) とその時の恥辱を追体験するワイルドは、アブジェクトな身体をみずから語りによって再び露呈することで、それを冷酷な観客たちへの痛烈な攻撃へと転化している。ここで自己自身を危機にさらす行為は、たんなる非難や裁断ではなく、社会的規範の核心への批判に直結している。

ワイルドはまた、この humiliation を humility へとつなげることで、この批判を安易な自己嫌悪や絶望感からも逸らしている。これは因襲的なキリスト教への包摂とは異なっている。むしろ、このテキストでのキリストへの言及は、『社会主義下の人間の魂』と『深淵より』との連続性を強調する手段だと解釈できるのではないだろうか。すでに論じたように、前者は私有財産の廃棄による真の個人主義の開花を謳いつつも、その実現の不可能性という構造的ジレンマに囚われていた。対照的に、『深淵より』のもっとも重要な点は、次の一節におけるようにワイルドが自身の投獄と剝奪状態を、まさしく私有財産の廃棄の実現として、積極的・倒錯的にとらえ返す美学的な転回にあるのではないだろうか。

あらゆる異質な情熱、あらゆる獲得した教養、善悪にかかわらず、あらゆる外的な所有物を除去することによってのみ人は自らの魂を実現する。……私は自分の名前、地位、幸福、自由、富を失った。……私が到達したのは当然、私の魂の究極の本質だったのだ。(The Soul of Man 113-14)

ここでは、あらゆる私的所有の喪失が、逆説的にも個人主義の真髓として受容されている。本来なら正当化されるべきでもなく、耐え忍ぶこともできない剝奪状態を批判的な自己変容の契機とする強烈な意志——「批評の深淵」、「実践」としての批評を、このテキストの「深淵の批評」に見出すことが可能なのは、このようなユートピア的衝動の「実現」が、自己の危機、さらに社会的規範への批判と同時に実践されているためである。

5. モダニズム再考

以上のように本論は、「批評とはなにか」を追求しつつ、初期の批評から『社会主義下の人間の魂』を経て、『深淵より』へと至る道筋を跡づけることを試みた。結論としてここでは「実践」としての批評の典型例を『社会主義下の人間の魂』と『深淵より』とをつなぐ線に見出したが、それは他のテキストにも潜在する契機かもしれない。本論は、そのような批評言説のユートピア主義的な側面を強調しつつ、その真価をテキストの固有に情動的な次元に探り出す試みだった。本論が確認した二つのあいだの密接な関係を思えば、ワイルドの「批評」の見直しは、盛期モダニズム観再考への最初の一步ともなるだろう。

注

- 1 モダニズムにおけるワイルドの抑圧については、Ardis や Hickham を参照。
- 2 二者の共通点については、Butler, "What Is Critique?" を参照。
- 3 Lesjak もワイルドのユートピア性を指摘しているが、その論点はほぼプロッホ的な「ユートピア的衝動」に関わっている。以下の議論では、むしろ「ユートピア的形式」の問題に焦点を合わせる (Jameson を参照)。
- 4 『深淵より』の行為遂行的な批評性を指摘した鈴木論文を参照。
- 5 Guy and Small は草稿研究の観点からこのテキストの「宛て先」の複数性を指摘しているが、それが生み出すテキスト的效果には触れていない。

Bibliography

- Adorno, Theodor. W. *Prisms*. Trans. Samuel and Shierry Weber. London: Neville Spearman, 1967.
- Ardis, Ann. *Modernism and Cultural Conflict 1880-1922*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Bush, Ronald. "In Pursuit of Wilde Possum: Reflections on Eliot, Modernism, and the Nineties." *Modernism/Modernity*. 11.3 (2004): 469-85.
- Butler, Judith. *Giving an Account of Myself*. New York: Fordham UP, 2005. ジュディス・バトラ

- 『自分自身を説明する — 倫理的暴力の批判』 佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、2008年。
- , “What Is Critique? An Essay on Foucault’s Virtue.” *Judith Butler Reader*. Ed. Sara Salih and Judith Butler. Oxford: Wiley-Blackwell, 2003. 302–22.
- Eliot, T. S. “The Function of Criticism.” *Selected Essays*. London: Faber and Faber, 1932: 23–34.
- Guy, Josephine M. and Ian Small, “Reading *De Profundis*,” *English Literature in Transition, 1880–1920*. 49:2 (2006): 123–49.
- Hickham, Miranda B. *Geometry of Modernism: the Vorticist Idiom in Lewis, Pound, H. D. and Yeats*. Austin: U of Texas P, 2005.
- Jameson, Fredric. *Archaeologies of the Future: The Desire Called Utopia and Other Science Fictions*. London: Verso, 2005. フレドリック・ジェイムソン、『未来の考古学1 — ユートピアという名の欲望』 秦邦生訳、作品社、2011年。
- Lesjak, Carolyn. “Utopia, Use, and the Everyday: Oscar Wilde and a New Economy of Pleasure.” *ELH* 67 (2000): 179–204.
- Lewis, Wyndham. “Automobilism.” *Creatures of Habit and Creatures of Change: Essays on Art, Literature and Society 1914–1956*. Ed. Paul Edwards. Santa Rosa: Black Sparrow, 1989: 33–34.
- , ed. *Blast: Review of the Great English Vortex*. Santa Rosa: Black Sparrow, 1981.
- , *Time and Western Man*. Ed. Paul Edwards. Santa Rosa: Black Sparrow, 1993.
- Waldrep, Sheltan. *The Aesthetics of Self-Invention: Oscar Wilde to David Bowie*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2004.
- Wilde, Oscar. *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1969.
- , *The Soul of Man and Prison Writings*. Ed. Isobel Murray. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Williams, Raymond. *Keywords*. London: Fontana, 1976.
- 鈴木英明「行為としての批評 — De Profundis 論 —」『オスカー・ワイルド研究』第七号 (2005) : 1–14.

多面性と快樂

— 「シェイクスピアと舞台衣装」／「仮面の真理」を中心に —

金 田 仁 秀

21世紀を迎え、没後100周年から既に10年経った現在もワイルド産業は衰えるばかりか、ますます繁栄している。そうした中、Julia Woodが指摘するように、昨今「文学的な」回復として、作家としてのワイルドに関する新たな論がなされるようになってきた。ワイルドの批評に関してもこれは同様で、大きな流れとして、初期の芸術至上主義の側面から見る批評から、政治的なものとして捉える批評へと移行してきている。それはまた、ワイルドの批評が表面的で重要ではないという見解から、シリアスで真摯なものであるという見解への変化とも対応している。また、Ian Smallが*Oscar Wilde Revalued*で指摘しているように、アーノルドやペイターといった19世紀の伝統に対してワイルドの批評を論じるのか、或いはモダニズムの関心を予期するものという観点から論じるのかといった大きな流れもある。後者に関しては、更にポスト構造主義を予見させる要素をワイルド批評に見出すといった昨今の論へと繋がっている。

さて、ここまで漠然とワイルドの批評と述べてきたが、彼の批評をまとめて、ある種の体系があるように捉えることには困難が伴う。もっとも議論されてきたのは *Intentions* にある論考、特に「嘘の衰退」と「芸術家としての批評家」である。また、「社会主義下の人間の魂」もよく論じられてきた。それと比較すると、彼が *Pall Mall Gazette* や *Dramatic Review* に載せた批評は、別のコンテキストで、例えばジャーナリズムとの関係や消費社会との関係などで取り上げられるか、*Intentions* の論考をサポートするものとして取り上げられる傾向にある。また、アメリカ公演ツアー時のワイルドの批評に関しては、*Intentions* の特に芸術至上主義的な議論の萌芽として考察されたり、或いは芸術至上主義的なものから社会批評的要素への変化を示すものとして考察されている。

こうした動向を踏まえてワイルドの批評を改めて眺めてみると、やはり直面さ